

京都大学	博士（人間・環境学）	氏名	江 琳
論文題目	南宋時代における遞舗路の経路復原研究		
（論文内容の要旨） 本論文は、中国・南宋時代（12～13世紀）における遞舗路について、その具体的な経路を小縮尺の地形図上に復原することを目的とした研究である。 遞舗路とは、公文書等の情報伝達に利用された道路をいう。南宋王朝は、強大な軍勢力を擁する金（女真）と隣接したため、軍備強化はもとより、情報伝達網の整備にも力を注いだ。唐代以前の中国では、街道に公用旅行専用の馬や宿泊施設が王朝により設けられ（駅伝制）、公文書の遞送にもこれが利用されたが、宋代になると、民間の施設・設備が充実したこともあって、王朝は情報伝達の機能を有する施設の整備に専念した。本論文が遞舗路を主題としたのは、唐から宋にかけての交通政策史上の大きな変革、つまり、駅伝制から遞舗制への変化に着目したために他ならない。 南宋時代の遞舗路については、青山定雄・曹家斉らによる先行研究が存在する。「序論」では、主要な先行研究による成果を紹介しつつ、従来の研究に不足している点を研究上の課題として指摘する。すなわち、先行研究では、南宋の都・臨安府（浙江省杭州市）周辺や四川・広南地方に焦点が当てられがちで、それ以外の地域については等閑視されてきたこと、遞舗路の経路復原に関する研究が手薄であること、の2点が主要な問題点である。前者の問題点を承けて、本論文では、臨安府とそれに隣接する両浙西路、臨安府の北に位置し軍事上の最前線にあった江南東路、政治・経済的に重要でありながら十分に研究されてこなかった江南西路・福建路を研究対象に設定した。また、後者の問題点については、遞舗路の経路復原を行い、それを小縮尺（5万分の1）の地形図を基図として具体的に呈示することを研究目標に掲げた。 従来の中国交通史研究は、その多くが文章のみによって交通路の経路を説明し、それが地図上に示されることはまれであった。また、経路を地図上に示した研究について言えば、基図として用いられるのは譚其驤主編『中国歴史地図集』等に掲載された大縮尺（100万分の1以上）の地図であり、そうした地図には通常、地形情報が一切含まれていない。本論文では、文献資料（宋代以降の地理書、正史、会要・会典等の政書など）を博搜し遞舗に関する史料を収集・整理・考証するという歴史地理学の伝統的な研究手法を踏襲した上で、かかる問題点を乗り越えるべく、小縮尺の地形図を基図として遞舗路の復原経路を示すこととした。これは、従来の研究には見られない斬新な研究手法である。20世紀前半に作製された小縮尺地形図を、南宋時代の遞舗路復原図の基図として利用するに当たっては、近代における道路・鉄路・水路等の交通路の開発史を調べた上で、前近代の交通路を地形図上で確認できるか否かを慎重に検討した。			

第1章～第4章では、上記の各地域について遞鋪路の経路を復原し、それらを地形図上に示した（概念図7点、経路復原図46点を作製）。第1章では国都臨安府と長江下流の最重要都市・建康府（南京市）とを結ぶ遞鋪路、第2章では臨安府と浙東東部の重要都市である温州とを結ぶ遞鋪路、第3章では臨安府と福州（北宋後半以来、政治・経済的な重要度を増してきた福建路の中心都市）とを結ぶ遞鋪路、第4章では臨安府と隆興府（江西省南昌市。南宋時代、銅などの資源開発が盛んに行われた地域）とを結ぶ遞鋪路、のそれぞれについて経路復原を行い、経路を地形図上に示した。経路の呈示に際しては、まず各遞鋪路の経路全体を「概念図」として示した上で、詳細な経路をいくつかのブロックに分けて地形図上に示し、それぞれの地図を見やすい大きさを提供しよう心がけた。

「結論」では、本論文の成果として、当初の目標がおおむね達成されたことを述べた。すなわち、遞鋪路が経由した地名の考証を詳細に行い、それに基づく遞鋪路の経路を5万分の1地形図を基図とする復原図として呈示したことである。先行研究において概念図として示されるに過ぎなかった遞鋪路の経路が、詳細な地形情報を伴って示されたことは、従来の研究を大きく乗り越える成果である。最後に、今回詳細に解明された南宋時代の情報伝達網のひろがりのもつ意義を、政治・社会・経済史上の問題と絡めて研究してゆくことを今後の課題として述べた。

本論文は、中国・南宋時代における遞鋪路の経路を小縮尺の地形図上に復原しようと試みたものである。

遞鋪とは、宋王朝が街道上に設置した公文書遞送のための中継所である。唐代以前の「駅伝制」では、街道に公用旅行専用の馬や宿泊のための施設が設けられ、公文書遞送にもこの施設が利用されたが、宋代になると、旅行には民間の施設が用いられるようになり、王朝は公文書など公的な情報を伝達するための施設の整備に専念した。つまり、唐から宋にかけて、駅伝制から遞鋪制への変化がおこったわけであり、これは中国交通政策史上の一大変革であると言える。また、宋代における遞鋪の配置状況を解明することは、王朝の情報伝達網の拡がり、ひいては王朝の統治の具体像を知る上できわめて重要な手がかりとなる。

本論文は、上述した中国交通政策史上の変革に着目して遞鋪制度を研究対象とし、宋代における遞鋪網の具体像を解明すべく、その経路復原を研究目標に設定した。研究対象とする時代を南宋に限定したのは、北宋時代に比べて南宋時代の方が文献資料が豊富であることに加えて、金（女真）による軍事的圧力の存在が図らずも遞鋪制度の一層の充実を促したことによる。つまり、宋代の遞鋪制度は、南宋時代に至ってその完成を見たのである。その意味で、本論文が南宋時代の遞鋪制度について、遞鋪設置の具体像を視覚的にとらえようとした試みは、大きな意義をもつと言い得る。

さて、本論文の研究方法は、①中国歴史地理学の伝統的な研究手法に基づき、典籍史料（宋代以降の地理書、正史、会要・会典などの政書が中心）を博搜し関係資料を収集・整理・考証、②遞鋪の具体的な位置を確定、③遞鋪の位置を小縮尺（5万分の1）地形図上に記入、④当時の遞鋪路を地図上に復原（その際、地形図に示された前近代の道路・水路の経路が拠りどころとなる）、というものである。①・②についてはきわめてオーソドックスな手法であるが、③・④は従来の研究には見られない、独創的で斬新な手法である。③で用いられた中国大陸の5万分の1地形図は、戦前（20世紀前半）主に軍事目的で作製されたため、戦後における保存は偶然によるものが多く、研究機関あるいは民間が保管する地形図を閲覧するには多くの困難がつきまとった。それが容易になったのは、1980年代半ばに『中国大陸五万分の一地図集成』（科学書院）が出版されてからのことである。さらに今世紀に入って、中央研究院近代史研究所（台北）が所蔵する膨大な地形図データをインターネット上で公開したことにより、地形図に関する情報はさらに充実した。本論文で利用されているのは、CHMAP（上海交通大学が提供する、ネット上の地形図情報サービス）である。これは今世紀10年代以降に開始されたもので、上記の地形図情報もこれに含まれる。要するに、近代に作製された小縮尺の地形図を中国歴史地理学研究に十二分に活用できるように

なったのはごく最近のことであり、その意味で本論文で採用された研究方法は、まことに時宜を得たものと言わねばならない。また、50点に余る経路復原図（概念図を含む）を、煩を厭わず作製した努力についても高く評価したい。

問題は、20世紀前半に作製された小縮尺の地形図を12～13世紀の中国における通舗路の経路復原の基図として用いることの妥当性である。この点については、中国近代における当該地域の交通路の整備に言及した説明が「序論」中に見え、そこで述べられていることで納得し得る。つまり、前近代の交通網に大きな変化をもたらしたのは、近代における馬車道・自動車道・鉄道などの登場であり、それ以前における変化は軽微であると考えて問題はないと思う。その意味において、本論文で採用された研究方法が妥当であることの蓋然性は高いと考えられる。しかし、より万全を期して、前近代における交通路の変化の有無について、本論文で扱った一地域に限定してでも、史料考証を行ってもよかったのではないか。

もう一点気になったことは、本論文で得られた成果が、南宋史研究あるいは中国交通史研究にどのように貢献できるのか、本論文における研究成果の波及効果について、明確に語られていない点である。確かに、南宋時代に発達した通舗網の具体的な様相を地形図上に示したことは、非常に大きな意義をもつ。ただ、この研究成果が同時代の政治・経済・社会史に関する研究、あるいは中国交通史研究に対して、どのように関連して発展してゆくのかについては、序論および結論部分で簡単に触れられたに過ぎない。この点些か残念であった。

上記のような課題はあるにせよ、緻密な史料考証の基礎の上に南宋時代の通舗網を復原し、その成果を地形図上に明示した本論文は、きわめて斬新で独創的な研究成果として高く評価できる。

よって、本論文は、博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和7年1月21日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 令和 年 月 日以降